

自由研究発表

1914年スマラン植民地博覧会の地域文化財保護活動への影響

Influence of the 1914 Semarang Colonial Exhibition to local preservation works of cultural properties

坂井 隆 (NPO 法人アジア文化財協力協会)

SAKAI Takashi (Association of Asian Cultural Properties Cooperation)

1914年に中部ジャワのスマランで、植民地博覧会というオランダ領東インド史上最初の大規模野外イベントが開催された。その実現は華人最大実業家ウイ・ティオン・ハムの用地提供と、植民地政府の全面的後援によった。アジア東部の海外からの参加もあり、東インドの貿易促進を目的とした公共展示会であった。スマランはオランダ領東インドで最初に鉄道が敷設され、30万平米の広大な会場は7年前に建てられた蘭印鉄道本社に隣接していた。博覧会と同年には2か所の新駅が建設されるなど、スマランは好況下にあった。

3か月間の期間中の入場者数は60万人を超え、その多くは低額の入場料での地元民だった。企業館・商品作物農園と共に建設された各地方館の存在は、多様な各地の地元民文化の存在を開催目的とは無関係に入場者に意識させたと思われる。

オランダ領東インドでの文化財保護活動は、1778年に設立されたアジア最古のバタヴィア芸術科学協会附属博物館に始まる。以後135年間、途中で総督宮殿近くに移ったこの施設はほぼ唯一の文化財保護機関で、帝国主義時代のオランダ支配者たちは今日のインドネシア相当地域の全民族統治誇示のため各民族物質文化要素の全体展示を試みた。しかしバタヴィアへ運べない各地の遺跡の保護は難しく、植民地支配が倫理政策へ修正された時、ボロブドゥールの修復を契機に1913年にオランダ領東インド考古局が設立された。だが人材はまだ少なく、各地域での他の文化財保護には無力だった。

翌年の植民地博覧会全パビリオンで最大評価を受けたのが、征服されたばかりのアチェ館である。そのためアチェの木造切妻高床民家をほぼ正確に再現したこの建物は、博覧会終了後にクタラジャで再建されアチェ博物館として現在まで使われている。一方前年に開館した東部ジャワのモジョクルト博物館はオランダ領東インド最初の地方博物館で、それを建てたクロモジョヨ・アディネゴロは10年後にトロウラン遺跡を調査するマジヤパイト文化財調査事務所を植民地博覧会のデザイナーのマクレーヌ・ポントと共に開設した。

アチェ博物館館長フリードリッヒ・スタンメシャウスと同様にポントは東インド生まれで、彼らは各地地元民有力者との協力でそのような地域活動ができた。政治的緊張を迎える1914年のスマランでの植民地博覧会は、結果的に文化財は地元で保存すべきという大原則をオランダ領東インドで出発させたと言えることができる。